

平成 26 年度
全 国 調 査 報 告 書

全国特別支援学級設置学校長協会調査部
協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

あいさつ

全国特別支援学級設置学校長協会
会長 阿部 謙 策
(葛飾区立梅田小学校長)

昨年(2019)の1月20日に、懸案になっていた障害者の権利に関する条約が批准され2月19日に発効しました。このことは特別支援教育に日々直接携わる我々にとって意義深いことであります。教育の分野においても、その条約に基づいて様々な施策を着実に進めていくことになります。政府は2年をかけて実際に取り組んできた状況を、ジュネーブにおかれている国連の権利条約の権利委員会に実施状況の報告書を提出し、その内容について委員会勧告がなされます。障害のある児童生徒の一人一人が適切な教育の場において、十分に達成感や満足感をもって学べる状況になっているかなど、今後のインクルーシブ教育システムの構築の状況が評価されることになります。きちんとした評価を受けるためにも、これからの特別支援教育の充実がますます重要になってくることでしょう。文部科学省においても、「教職員の資質の向上」、「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援」「インクルーシブ教育システム構築モデル事業」など特別支援教育の充実のための様々な施策の実現に向け、平成27年度の予算要望として、今年度より18億円増の149億円の概算要求をしました。

また、平成26年11月20日には、中央教育審議会において「初等中等教育における教育課程の基準の在り方について」の諮問がなされました。今後新しい学習指導要領の改訂に向けての作業も始まってきます。学習指導要領にこれからの特別支援教育の在り方が、どのような形で反映されていくか、注目していく必要があるでしょう。

このような特別支援教育に関わる状況がある中、公立小中学校で特別支援学級設置校の校長として、この変化をどのように捉え、どのような対応をすべきか課題解決のための参考にするために実施しているのが本協会の全国調査です。昨年度は、交流及び共同学習が重視されることを踏まえ、特別支援学級の教育課程編成上の課題を明確にしました。今年度は昨年度の結果から各教科等の指導の際に主たる教材となる教科書の活用状況等について調査しました。

今回も抽出調査として、本協会の知的障害学級及び自閉症・情緒障害学級のそれぞれ10%の回答を目標に調査した結果、全体の約8.5%にあたる2646校より回答を頂きました。今年度も、各設置校の校長先生方のご協力に対し改めて深くお礼を申し上げます。この結果をもとに、インクルーシブ教育システムの理念を基とした共生社会の実現に向け、各地区や各校の特別支援教育がますます充実されますことを心より願っています。

結びになりますが、今年度の調査につきましても以前より引き続きご協力いただいた、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 主任研究員 小澤 至賢 先生には調査に関して、常に懇切丁寧なご指導ご助言をいただきました。会を代表して、心より感謝と御礼を申し上げ、巻頭のあいさつといたします。

目 次

あいさつ

全国特別支援学級設置学校長協会 会長 阿部謙策

I 調査目的	1
II 調査方法	1
III 調査対象	1
IV 調査期間	1
V 調査内容	1
VI 調査結果及び考察	
1 特別支援学級の種別回答校数	2
2 種別毎の教育課程編成の状況	2
3 教科書を「選択」する際に、主に参考としていること	3
[小学校]	
4 国語・算数・音楽で「選択した教科書の活用等の状況について	4
5 教科書の活用で特色にしていること（主な自由意見）	9
[中学校]	
4 国語・数学・音楽で「選択した教科書の活用等の状況について	10
5 教科書の活用で特色にしていること（主な自由意見）	15
[小中学校]	
6 教科書選択及び活用等についての要望（小中学校全体の集計）	16
VII 全体考察	18
資料 1 特別支援学級設置学校の基本情報のまとめ	20
資料 2 平成 26 年度全特協アンケート調査内容	25

あとがき

I 調査目的

全国特別支援学級設置学校長協会（以下、全特協）では、毎年、全国の特別支援学級設置学校長（以下、設置学校長）が特別支援教育の推進をより一層図るために、全国調査を実施している。

昨年度の調査では、交流及び共同学習が重視される現状を踏まえ、特別支援学級の教育課程編成上の課題を明確にできた。その中でも下学年の教科等と自立活動を重視した教育課程を編成している学校が多いことや個々の障害の程度や発達段階の違い、特性等に応じた柔軟な教育課程を編成している現状が明らかになった。

今年度は、昨年度の調査結果を受けて、各教科等の指導の際に主たる教材となる教科書に視点を当て、その活用状況を調査することにした。

今回の調査は、全国の特別支援学級（自閉症・情緒障害特別支援学級を含む）の教科書採択及び活用状況の調査を通して、その調査結果を都道府県校長会における特別支援教育の推進や充実のための資料として提言するとともに、全特協としての意見や提言としてまとめることを目的として実施する。

なお、例年継続して調査している特別支援学級に関わる基本情報は、経年変化を見るため、今年度も調査項目として加えた。

II 調査方法

- (1) 質問紙法による調査
- (2) 全特協の各都道府県理事を通して、全国に設置されている知的障害特別支援学級と自閉症・情緒障害特別支援学級のある小学校及び中学校へ調査依頼した。
- (3) 全特協ホームページへのアクセスにより、調査を回答する。

III 調査対象

各都道府県に設置されている知的障害特別支援学級設置校及び自閉症・情緒障害特別支援学級設置校から 10%を抽出した小・中学校長

※ 対象地域は、全国 1800 弱の市町村と東京都 23 区である。

IV 調査期間

平成 26 年 7 月中旬から 10 月初旬

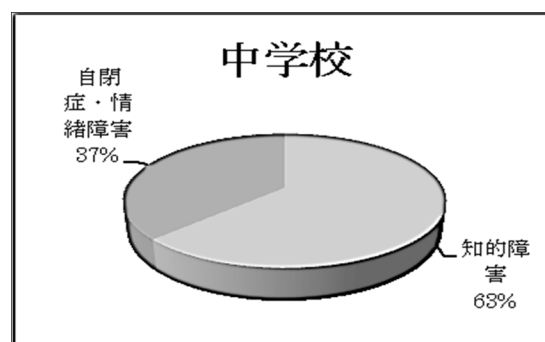
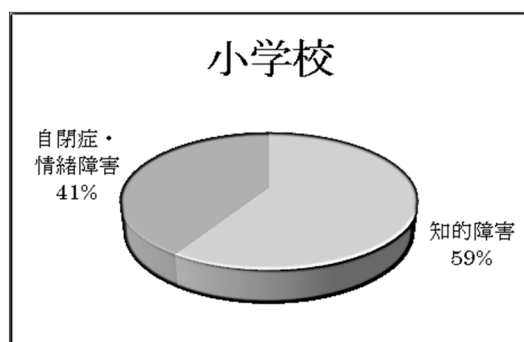
V 調査内容

- (1) 特別支援学級と設置する学校の基本情報（経年調査）
- (2) 特別支援学級が採択している国語・算数（数学）・音楽の教科書採択の状況
- (3) 採択された教科書の活用状況
- (4) 特別支援学級における教科書採択に関する意見、要望
- (5) その他

VI 調査結果及び考察

1 特別支援学級の種別回答校数

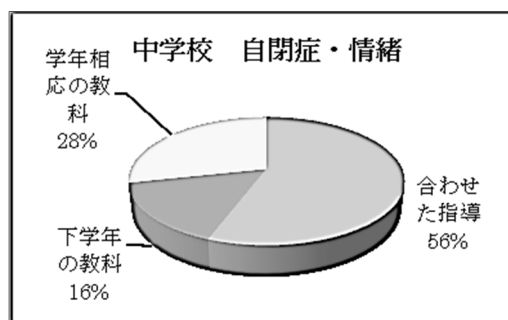
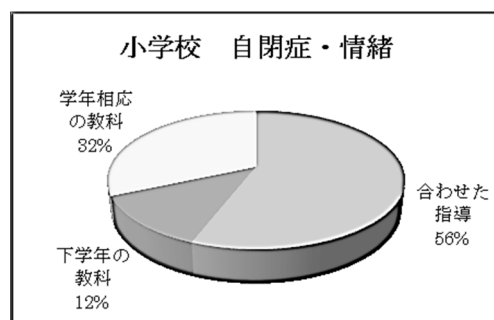
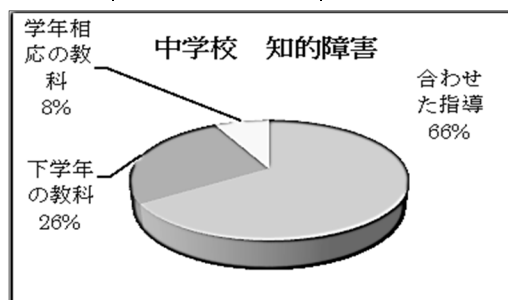
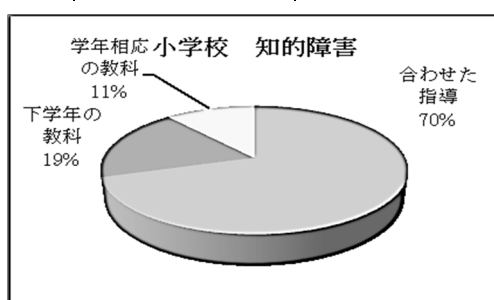
	小学校	中学校 (小・中学校含)	合計
知的障害	1070	523	1593
自閉症・情緒障害	743	310	1053
合計	1813	833	2646



回答いただいた特別支援学級設置学校は、小学校1813校、中学校833校、小中合わせて2646校であった。この校数は、平成25年度の全国の特別支援学級設置学校数、約31,000校中、およそ8.5%に当たる。

2 種別毎の教育課程編成の状況

		合わせた指導＋教科別の指導	下学年の教科	学年相応の教科
小学校	知的障害	1017(70%)	268(19%)	164(11%)
	自閉症・情緒障害	635(56%)	142	359(32%)
中学校	知的障害	534(66%)	216(26%)	62(8%)
	自閉症・情緒障害	257(56%)	73	131(28%)



小中学校の知的障害特別支援学級と自閉症・情緒障害特別支援学級の教育課程を調査した。知的障害特別支援学級で、最も多く教育課程で編成しているのが「領域・教科を合わせた指導＋教科別の指導」である。小学校70%、中学校66%が編成している。次に多

い「下学年の教科」では、小学校 19 %、中学校 26 %が編成している。「学年相応の教科」では、小学校 11 %、中学校 8 %が編成している。知的障害特別支援学級においては、小中学校に多少の数値の差はあるが、教育課程編成の傾向は概ね似ている。

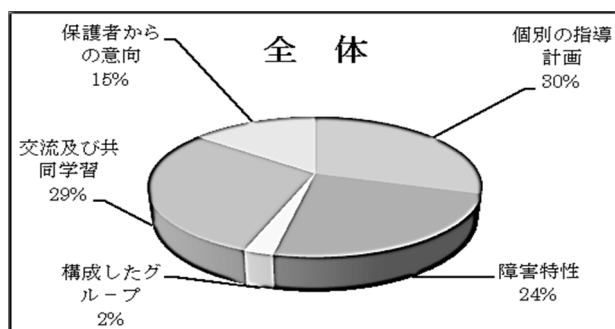
自閉症・情緒障害特別支援学級においても、最も多く教育課程で編成しているのが、「領域・教科を合わせた指導＋教科別の指導」である。小中学校共に 56 %が編成している。ただし、知的障害特別支援学級よりも 10 ポイント以上低い。次に多いのが「学年相応の教科」である。小学校 32 %、中学校 28 %が編成している。この割合は、知的障害特別支援学級よりもおよそ 20 ポイント高い。小中学校の教育課程編成の傾向は似ている。

全体を通して、障害種別にかかわらず、特別支援学級では、「領域・教科を合わせた指導＋教科別の指導」を主として編成していることが分かる。特に小学校知的障害特別支援学級にその傾向は強い。自閉症・情緒障害特別支援学級では、知的障害特別支援学級と比較して、「学年相応の教科」を多く取り入れている。障害の特性を十分に考慮した教育課程の編成をしていることが伺える。

3 教科書を「選択」する際に、主に参考としていること

	個別の指導計画	障害特性	構成グループ	交流・共同学習	保護者の意向
合わせた指導	534	378	91	371	187
下学年の教科	193	127	10	152(38%)	58
学年相応教科	82	70	5	128(37%)	60
合 計	809(30%)	575(24%)	106(2%)	651(29%)	305(15%)

※表の数字は、小学校では低・中・高学年児童対象に、中学校では各学年の生徒対象に、回答いただいた合計数を記している。以下の表の数字も同様である。

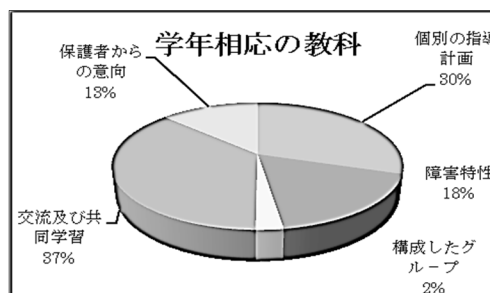
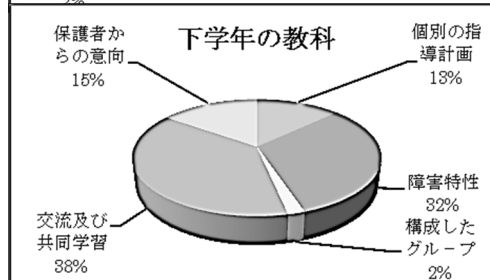
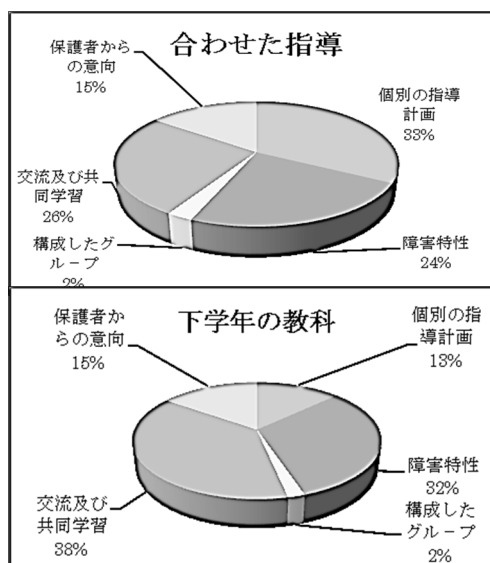


質問 15 では、教科書を選択する際、主に参考としていることを調査した。

全体では、「個別の指導計画」30 %、「障害特性」24 %、「交流及び共同学習」29 %、「保護者からの意向」15 %、「構成したグループ」2 %の順になっている。

「合わせた指導」「下学年の指導」「学年相応の教科」ごとに参考としていることを分析した。「合わせた指導」と「全体」では、各割合が同傾向であることが分かった。

「下学年の教科」と「学年相応の教科」では、「交流及び共同学習」が 37 %程度と割合が高い。通常の学級における共同学習を想定した結果であると推測する。

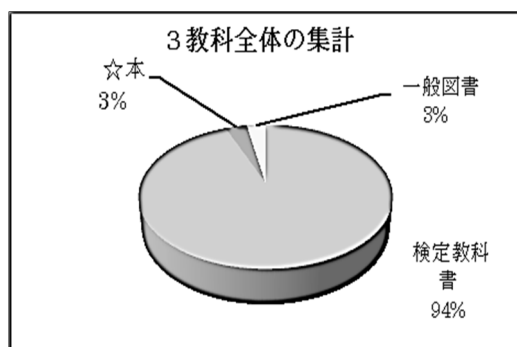
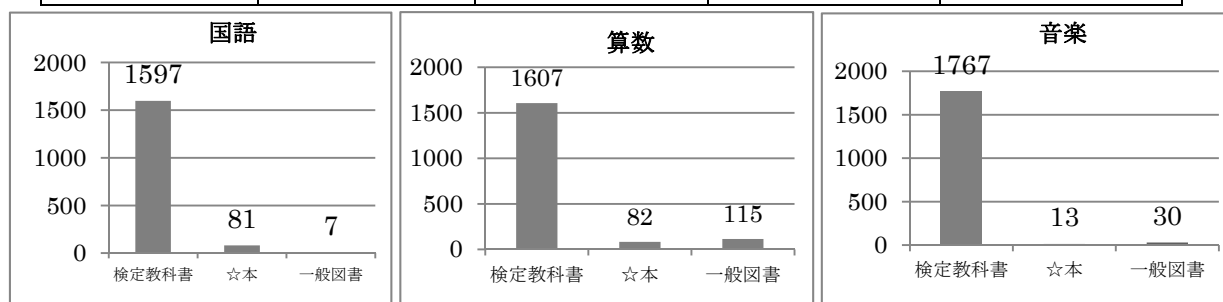


[小学校長]

4 国語・算数・音楽で選択した教科書の活用等の状況について

(1) 国語・算数・音楽で「選択」した教科書

	国語	算数	音楽	合計
検定教科書	1597	1607	1767	4971(94%)
☆本	81	82	13	176(3%)
一般図書	7	115	30	152(3%)

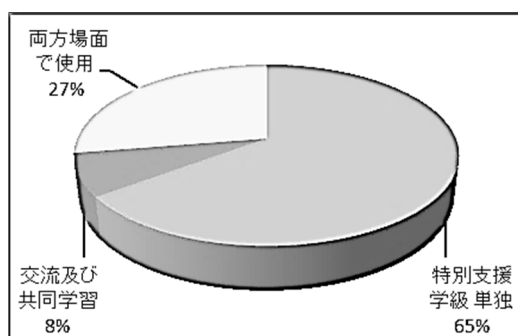


国語、算数、音楽で選択されている教科書は、3教科共に文部科学省検定済教科書（以下 検定教科書）が94%を占めている。知的障害者用の文部科学省著作教科書いわゆる☆本（以下 ☆本）、学校教育法附則第九条の規定による教科書（以下 一般図書）を選択している学級は合わせても6%と少ない。☆本に関しては、音楽が13学級である。一般図書に関しては、国語で7学級であり、特に選択している学級が少ない。

(2) 「選択」した教科書を「使用」した授業

① 国語で「選択」した教科書の使用場面

	特別支援学級 単独	交流及び共同学習	両方場面で使用
検定教科書	1015	126	456
☆本	73	2	6
一般図書	4	1	2
合計	1092(65%)	129(8%)	464(27%)

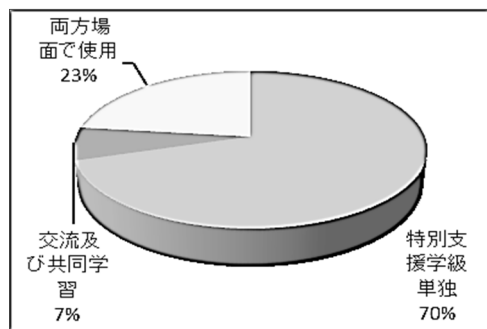


選択した教科書を主に使用する場面について調査した。国語で選択した教科書の使用場面は特別支援学級単独が65%、「両方の場面での使用」が27%である。「交流及び共同学習」では8%である。

選択されている検定教科書においても傾向が一致する。選択された☆本は、数は少ないが、特別支援学級単独での授業で主に使用されている。

②算数で「選択」した教科書の使用場面

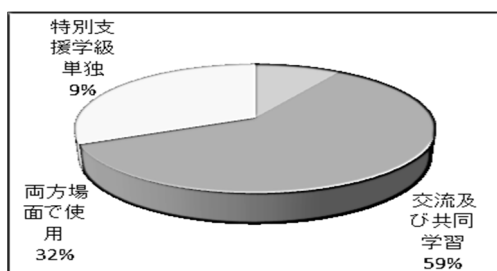
	特別支援学級 単独	交流及び共同学習	両方の場面で使用
検定教科書	1230(68%)	131	449
☆本	73	3	6
一般図書	105	2	8
合計	1408(70%)	136(7%)	463(23%)



算数で選択された教科書の使用場面は、「特別支援学級単独」が70%、「両方での使用」が23%、「交流及び共同学習」が7%である。検定教科書は、特別支援学級単独での使用が68%であった。☆本と一般図書を選択している数は少ないが、その中での使用場面は、特別支援学級単独の授業で選択する学級が多くの割合を占め、合わせて178の回答があった。

③音楽で「選択」した教科書の活用場面

	特別支援学級 単独	交流及び共同学習	両方の場面で使用
検定教科書	139	1065	563
☆本	10	3	0
一般図書	16	6	6
合計	165(9%)	1074(59%)	569(32%)

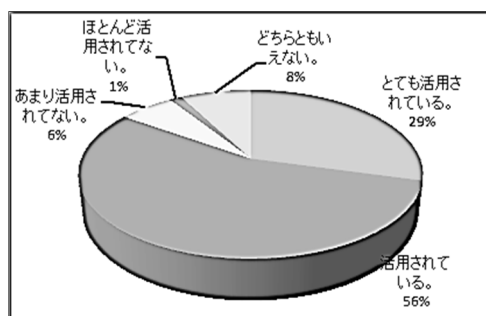


音楽で選定された教科書の使用場面は、「交流及び共同学習」が59%、「両方での使用」が32%、「特別支援学級単独」は9%である。

音楽で最も多く選択している検定教科書は、通常の学級での音楽の授業を視野に入れて選択していることがわかる。

④「選択」した教科書の活用状況

	とても活用されている	活用されている	あまり活用されていない	ほとんど活用されていない	どちらともいえない
国語	466	1034	122	29	159
算数	473	962	176	36	163
音楽	644	1013	34	11	108
合計	1583(29%)	3009(56%)	332	76	430

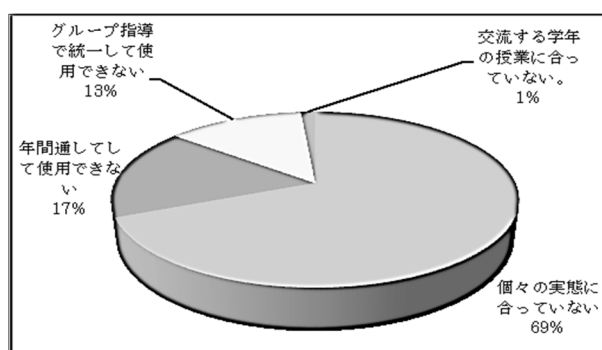


国語・算数・音楽で選択された教科書の使用状況を分析した。「とても活用されている」「活用されている」を合わせて85%である。

国語と算数においては、肯定的な回答が75%弱、音楽では91%であった。全体を通して概ね検定教科書が活用されていることが分かった、活用されていないという回答が、国語と算数で10%弱あった。「どちらとも言えない」との回答が国語と算数で共に9%あった。

⑤ ④で「あまり活用されていない」「ほとんど活用されていない」理由、問題点

	個々の実態に合っていない	年間通して使用できない	グループ指導では統一して使用できない	交流する学年の授業に合っていない
国語	341	93	54	5
算数	451	105	59	8
音楽	117	25	58	5
合計	909(69%)	223(17%)	171	18

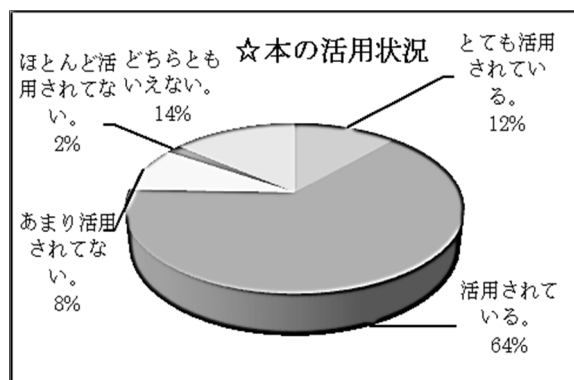


選択した教科書が「あまり活用できていない」「活用できていない」と回答した学級に理由と問題点を調査した。

問題点や課題として、最も多かったのが「個々の実態に合っていない」69%、次に「年間通して使用できない」17%と続く。3教科のその順位と割合に有意差はない。3教科共通に活用されない教科書の課題が浮き彫りになった。

⑥ ☆本を「選択」している教科の活用状況（括弧内は、☆本を「選択」している学級数）

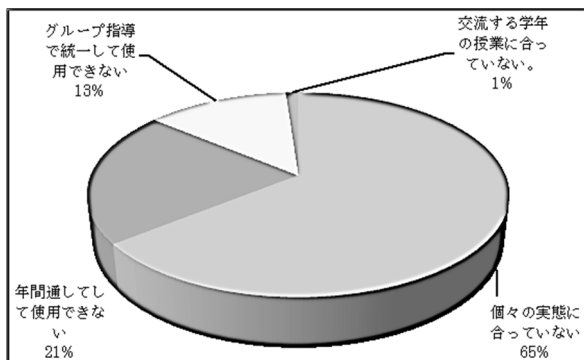
	とても活用されている	活用されている	あまり活用されていない	ほとんど活用されていない	どちらともいえない
国語	12	53	5	1	10
算数	8	50	9	2	13
音楽	1	9	1	0	2
合計	21(12%)	112(64%)	15(8%)	3(2%)	25(14%)



☆本に関する活用状況についても分析した。3教科全体を通して、「とても活用している」「活用している」との回答が合わせて76%と高い。「活用されていない」は10%である。「どちらともいえない」が、14%と④の回答の8%より6ポイント高い。☆本を選択した学級は176と全体的には少ないが、概ね活用されていることが分かった。

⑦ ⑥で「あまり活用されていない」「ほとんど活用されていない」理由、問題点

	個々の実態に合っていない	年間通して使用できない	グループ指導では統一して使用できない	交流する学年の授業に合っていない
国語	19	7	1	1
算数	34	9	2	2
音楽	5	7	1	0
合計	58(66%)	23(21%)	4(12%)	3(1%)

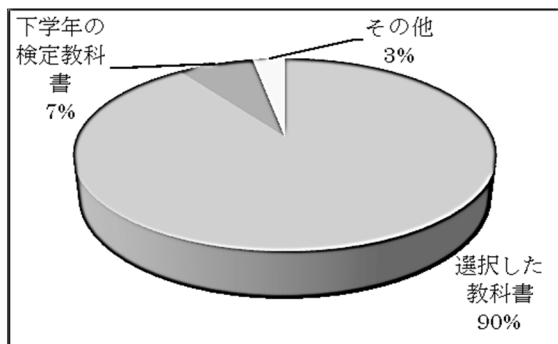


☆本が活用されていない理由について分析をした。

一番多い理由は、「個々の実態に合っていない」こと66%であった。「年間通して利用できない」こと21%、「グループ指導で統一して使用ができない」こと12%、「交流する学年の授業に合っていない」ことが1%である。検定教科書や一般図書の活用されていない理由と同傾向にある。

(3) 実際の授業において「使用」している教科書

	国語	算数	音楽	合計
選択した教科書	426	407	453	1286(90%)
下学年の検定教科書	35	51	14	100(7%)
その他	15	18	9	42(3%)

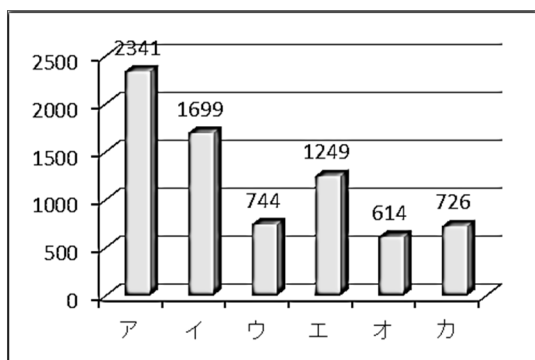


3教科で選択した教科書が、実際の授業で使用されているかを分析した。

3教科全体の傾向として、90%が「選択した教科書」を適正に使用している結果となった。「下学年の検定教科書」を7%が使用している。「その他」の理由は3%であった。

(4) 教科書を有効に活用するに当たっての課題

ア 一人一人に合った教科書採択ができる手続きにすること	2341(30%)
イ ☆本をさらに活用できるようにすること	1699(23%)
ウ 交流及び共同学習で活用できる検定教科書の内容の見直し	744
エ 教科書を活用できる教員の専門性の確保	1249(16%)
オ 年間通して使用できる一般図書	614
カ 系統性のある一般図書	726
キ その他	41



教科書を有効に活用するに当たっての課題で一番多いのは、「一人一人に合った教科書採択ができる手続きにすること」である。約30%から課題としてあがっている。

次に多いのは、「☆本をさらに活用できるようにすること」23%、「教科書を活用できる教員の専門性の確保」16%と続いている。☆本を選択している数は少ないが活用したいニーズは高い。

「キ その他」に記載された主な課題

(1)教科書の内容等に関する課題

- 視覚的に捉えやすい教科書にすること。（キャラクター、色など）
- 国語、算数は、スモールステップで自信をつけられること。
- 教科書よりもタブレット、PCでの学習が有効なので、その教科書に準拠するコンテンツデジタル教材を揃え、学習内容を工夫できるようにすること。
- 基本的な部分を重視してまとめた、年間を通して使用できる教科書、検定教科書の内容を精選、簡略した教科書、読み書きが苦手な児童に合わせて作った教科書、ワークテストのような教科書等が必要である。
- 「自立活動」の教科書が必要である。

(2)教師用指導書の必要性

- 教科書に対応した教師用指導書が必要である。また、スモールステップに対応した補助指導書もあるとよい。

(3)多くの教科書を選択できるようにすること

- 下学年の教科書を使用する方が効果的な場合がある。学年毎に選択するのではなく、一人一人の特性に合わせて選択できるようにしてほしい。教科書1冊全てを活用するには、個々の実態に合っていない。
- 当該学年だけでなく下学年の教科書も選択できること。
- 教科書と☆本、一般図書が無料で両方使えるとよい。一般図書を副読本のような形で活用できること。
- 国語、算数は、当該学年の教科書以外に、障害の程度に応じた教科書も、その両方またはいずれかを選択できること。
- 教科書採択の幅（冊数）を増やすこと。

(4)個々の児童に合わせたワークシート等の教材の工夫

- 教科書を大きくカラーコピーして、教師用・児童用を準備していること。
- 実際は個別にあった市販のドリルを使用せざるえないこと。

(5)教科書選定の時期

- 児童の実態に適した教科書を選択したいが、事務手続き上、選択の時期が早く、実際に使用できない現状があること。

(6)生徒、保護者の意向の反映

- 児童の実態に合った教科書選択が、同学年の検定教科書を希望する児童、保護者の強い意向によりできないこと。

(7)一人一人の実態にあった教科書を用いた指導ができる教員の確保

- 教員が児童の実態に合わせて、指導内容を厳選するとともに、その内容にあった指導計画を作成したり指導方法を考えたりする必要性があること。

(8)教育行政との連携

- 一人一人にあった教科書を選択する上で、自治体の教育委員会の理解が得られず、適切な教科書の採択ができない状況であること。
- 担当教員の資質・意欲の向上を図り、学校を越えた教科書活用の研修がより一層、推進されること。

5 教科書の活用で特色にしていること（主な自由意見）

(1) ☆本と一般図書の活用

- 現在の数学の☆本は、とてもよく作られている。特にトラペンシートで作られた部分など視覚的な理解を大いに活用している。また毎時間復習する際にも活用している。
- 一般図書の教科書を用いるときは、季節や行事など生活に合わせて活用している。

(2) 教材の工夫

- 障害の特性に合わせて、自作プリントで補っている。

(3) 生徒の実態に応じて教科書を使用する上での工夫

- 国語や算数の教科書は、その学年で選択した教科書はすぐには使えないが、1・2年遅れて系統的に指導するのに役立っている。低・中学年時に支給された検定教科書を高学年になって使用する。
- 個に応じて教科書通りの順でなく、まとめて学習したり、教科書の内容から離れて活用したりする。
- 下学年の国語の教科書をコピーして渡し、漢字に直せるところ（個々の実態による）を自分で書いた漢字のシールを貼って読んでいる。音読や視写を行い、頑張りやできるようになったことをシールや表で視覚化し、個々のやる気や達成感につなげている。

(4) 閲覧の工夫

- 障害特性に応じて、下学年の教科書も常時教室においている。

(5) 特色ある教育活動

- 一般図書では、書き込みができるページをコピーして、反復練習ができるようプリントとして準備している。ひらがなカードをカルタのように広げ、ゲーム的要素を取り入れた授業を展開している。
- 書画カメラとプロジェクターを活用して、教科書を拡大したり、一部だけを見せたりして、視覚支援を工夫している。デジタル教材を効果的に活用している。

(6) 特色ある活用方法

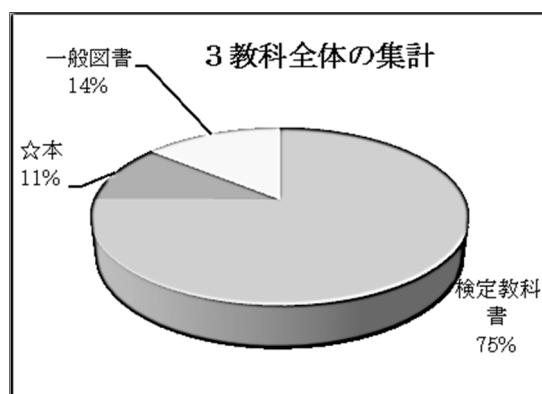
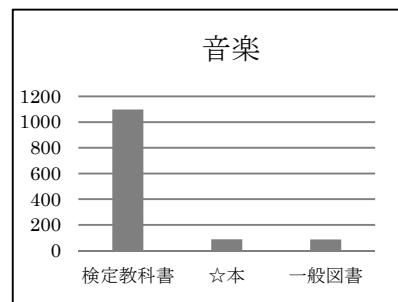
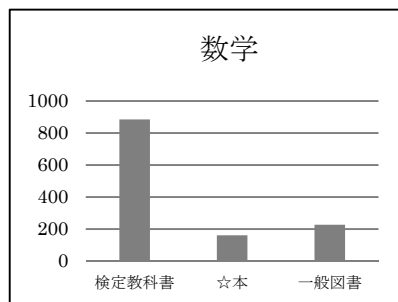
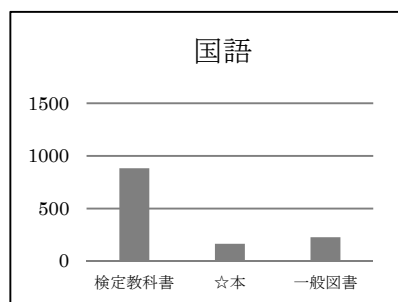
- 国語・算数等、特別支援学級で個別的な指導に役立てているが、内容によっては、交流学級と一緒に共同学習として行っている。そのため、文科省の検定教科書を基本としているが、より個別的な指導に活かすため、一般図書の活用も図っている。
- 文部科学省検定済教科書は、系統性があり、全ての単元は使えなくても児童の特性に合った単元について学年をまたいで系統的に指導している。
- 高学年の児童も1・2年生程度の教科書しか使えない。検定教科書、☆本もそのままでは使えないので、児童の実態に合わせて教材を作成している。
- 下学年の教科書を廃棄せず、次の学年等で振り返りながら活用している。
- 児童によって進度が違うため、年度内に選択した教科書を使用できない可能性もあるが、活用の可能性がある児童については、文部科学省検定済教科書（当該学年）を選択している。

[中学校長]

4 国語・数学・音楽で選択した教科書の活用等の状況について

(1) 国語・数学・音楽で「選択」した教科書

	国語	数学	音楽	合 計
検定教科書	882	885	1098	2865(75%)
☆本	164	161	88	413(11%)
一般図書	227	227	86	540(14%)

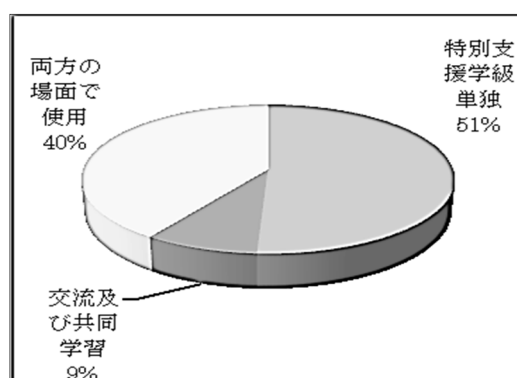


国語、数学、音楽で選択されている教科書は、3教科共に文部科学省検定済教科書（以下 検定教科書）が一番多く、75%を占めている。知的障害者用の文部科学省著作教科書いわゆる☆本（以下 ☆本）を選択している学級は11%、学校教育法附則第九条の規定による教科書（以下一般図書）を選択している学級は14%と共に少ない。小学校の選択状況と全体的に似ているが、中学校では、一般図書と☆本を選択している割合が小学校より高い。

(2) 「選択」した教科書を「使用」した授業

① 国語で「選択」した教科書の使用場面

	特別支援学級単独	交流及び共同学習	両方場面で使用
検定教科書	555	151	731
☆本	157	6	1
一般図書	217	4	6
合 計	929(51%)	161(9%)	738(40%)

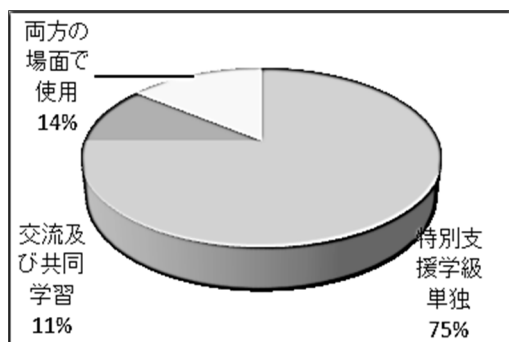


国語で選択した教科書の使用場面は、「特別支援学級単独」が51%、「両方の場面」が40%である。「交流及び共同学習」では9%である。この傾向は、75%選択されている検定教科書においても、その傾向と一致する。

☆本と一般図書に関しては、「特別支援学級単独」の授業で使用されている割合が95%を占めている。小学校の国語の活用場面と同傾向である。

②数学で「選択」した教科書の使用場面

	特別支援学級 単独	交流及び共同学習	両方の場面で使用
検定教科書	581	126	178
☆本	155	5	1
一般図書	218	4	5
合 計	954(75%)	135(11%)	184(14%)

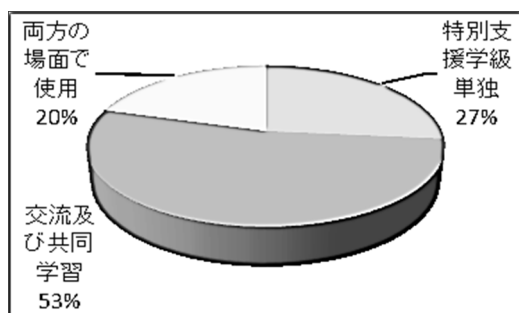


数学で選択された教科書の使用場面は、「特別支援学級単独」が75%、「両方での活用」が14%、「交流及び共同学習」が11%となっている。「特別支援学級単独」での使用場面の割合は、小学校の算数の70%と比較して、5ポイント高い。

☆本と一般図書の使用場面は、95%以上が特別支援学級単独である。

③音楽で「選択」した教科書の使用場面

	特別支援学級 単独	交流及び共同学習	両方の場面で使用
検定教科書	208	649	241
☆本	64	7	7
一般図書	61	9	9
合 計	333	665(55%)	257(20%)

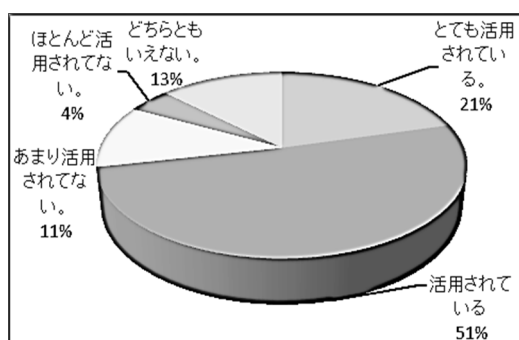


音楽で選定された教科書の使用場面は、「交流及び共同学習」55%、「特別支援学級単独」35%、「両方での使用」20%である。

「交流及び共同学習」の割合は、小学校の音楽が59%と比較して、同傾向にある。「特別支援学級単独で」の使用の割合は、小学校よりも高くなっている。

④「選択」した教科書の使用状況

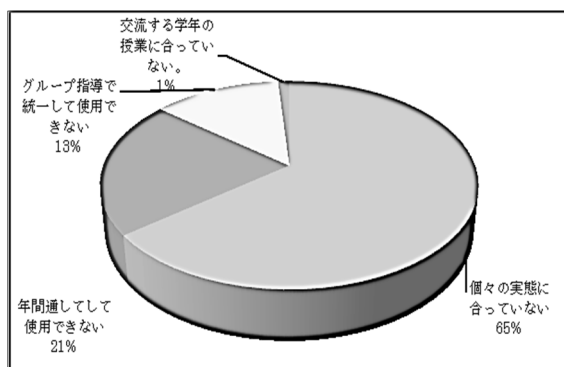
	とても活用されている	活用されている	あまり活用されていない	ほとんど活用されていない	どちらともいえない
国語	195	671	164	62	181
数学	178	604	192	89	210
音楽	420	670	63	18	102
合計	793(21%)	1945(51%)	419(11%)	169(4%)	493(13%)



国語・数学・音楽で選択された教科書の活用状況は、「とても活用されている」「活用されている」を合わせた割合が、72%である。音楽では、国語、数学と比較して活用度が高い傾向にある。否定的な回答は、15%と小学校よりも割合が高い。「どちらとも言えない」の回答も13%と小学校よりも高くなっている。

⑤ ④で「あまり活用されていない」「ほとんど活用されていない」理由、問題点

	個々の実態に合っていない	年間通して使用できない	グループ指導では統一して使用できない	交流する学年の授業に合っていない
国語	201	65	39	3
数学	245	75	48	2
音楽	54	26	14	4
合計	500(65%)	166(21%)	101	9

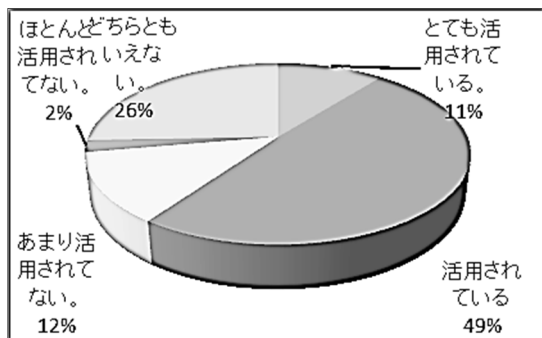


選択した教科書が「あまり活用できていない」「活用できていない」と回答した理由と問題点を調査した。問題点や課題として、最も多かったのが「個々の実態に合っていない」65%であった。「年間通して使用できない」が21%と続く。小学校の結果と同様の傾向である。

ただし、音楽に関しては、年間通して使用できない割合が、他教科より高い。

⑥ ☆本を「選択」している教科の活用状況

	とても活用されている	活用されている	あまり活用されていない	ほとんど活用されていない	どちらともいえない
国語	15	91	13	3	42
数学	12	76	20	4	49
音楽	17	35	18	2	14
合計	44(11%)	202(49%)	51(12%)	9(2%)	105(26%)

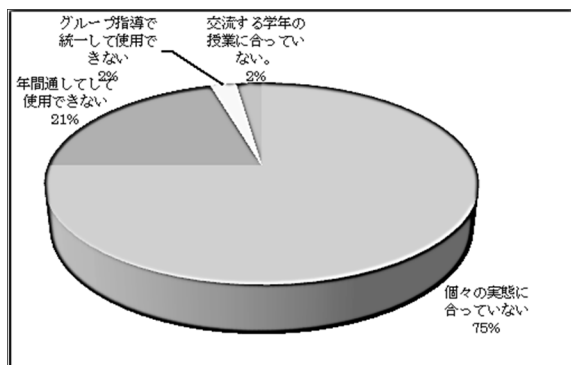


☆本の活用状況を分析した。3教科全体を通して、肯定的に評価している割合は、60%である。否定的な回答は14%である。「どちらとも言えない」は26%になっている。

小学校の肯定的回答が76%であるのに比べて16ポイント低くなっている。

⑦ ⑥「あまり活用されていない」「ほとんど活用されていない」理由、問題点

	個々の実態に合っていない	年間通して使用できない	グループ指導では統一して使用できない	交流する学年の授業に合っていない
国語	8	1	0	0
数学	15	2	1	0
音楽	10	6	0	1
合計	33(75%)	9	1	1

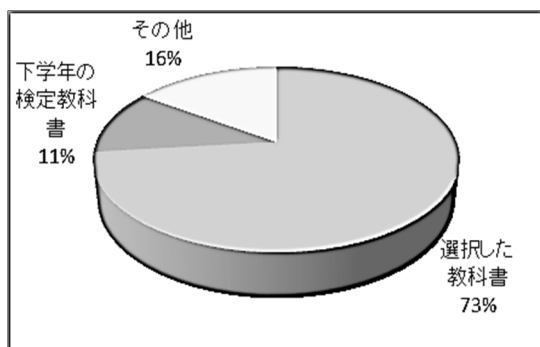


☆本が活用されていない理由について分析した。一番の理由は、小学校の理由と同様に、個々の実態に合っていないが75%を占めている。次の理由に挙がっている「年間通して使用できない」も小学校と同様である。

3教科の結果と比較すると、個々の実態に合っていない理由が10ポイント高い。

(3) 実際の授業において「使用」している教科書

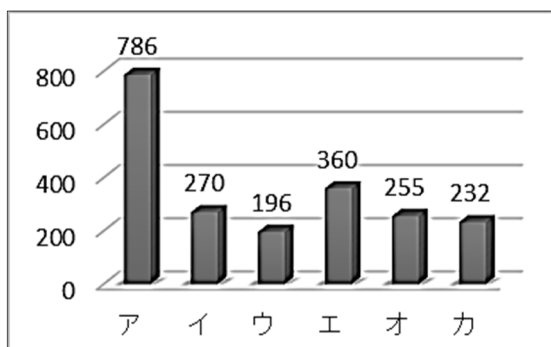
	選択した教科書	下学年の検定教科書	その他
国語	863	177	233
数学	795	221	257
音楽	1140(90%)	36	97
合 計	2798(73%)	434(11%)	587



選択された教科書が実際の授業で使用されているかを分析した。73%が選定した教科書を使用している。小学校では90%が使用していることと比較すると割合は少ないが、概ね選択した教科書を使用している。特に音楽に関しては、選択した教科書の使用率が90%に達する。下学年の教科書の使用は11%である。

(4) 教科書を有効に活用するに当たっての課題

ア 一人一人に合った教科書採択ができる手続きにすること	786(40%)
イ ☆本をさらに活用できるようにすること	270
ウ 交流及び共同学習で活用できる検定教科書の内容の見直し	196
エ 教科書を活用できる教員の専門性の確保	360
オ 年間通して使用できる一般図書	255
カ 系統性のある一般図書	232
キ その他	50



教科書を有効に活用するに当たっての課題で一番多いのは、「一人一人に合った採択ができるようにすること」である。約40%が課題として上げている。

「教科書を活用できる教員の専門性の確保」「☆本をさらに活用できるようにすること」と続く。特別支援学級教員の専門的な指導力により、教科書の活用に差が出てしまう現状がうかがえる。

「キ その他」に記載された主な課題

① 個々の生徒に合わせたワークシート等の教材の工夫

- 新出漢字は、日常使用する頻度を考慮して教師側で選択して取り上げる。
- 基礎計算の問題や既習の漢字を教科書より抽出し、繰り返し学習に利用している。
- 領域・単元等の中をさらに細かく分けた冊子(教科書)を作る等。

② 生徒の実態に応じた教科書活用の工夫

- 新1年生の実態や個々の生徒の実態に応じ、系統性のある教科書を順序立てて使用すること、国語・数学の一斉指導で使用すること、学習グループ構成に合わせ系統的な年間指導の在り方等。

③ 一人一人の実態にあった教科書を用いた指導ができる教員の確保

- 特定教科を個別に指導できる教員の確保

④ 教科書の内容や種類の充実

- 英語の一般図書の種類を増やすこと。
- 地区選択以外の他社の検定本の採択ができるようにすること。
- 生活課題と連携した内容で図や絵などを多くすること。

⑤ ☆本の充実

- ☆本を知的障害の程度に応じ、2・3種類増やすことや☆本を発展させた一般図書が2種類以上あること。

⑥ 一般図書の充実

- 中学生向けの一般図書を増やすこと。
- 教員に指導用一般図書が必要であること。
- 一般図書を各教科一冊以上選択し、年間通して使用できるようにすること。

⑦ 教科書の選択方法

- 個々の障害にあった冊子(教科書)を規定数(文科省で決定：例10冊)選択する方法に変更することで、活用頻度は大きく上がる。

⑧ 教科書選定の時期

- 生徒に合ったものを選択するために選定期間を遅らせること。

⑨ 生徒、保護者の意向の反映

- 該当生徒の能力や実態に応じた教科書が正しく選択できるよう、保護者への説明と相談を十分に行うこと。

⑩ 小学校との連携

- 新一年生の教科書選択に関しては、小学校で使用した教科書の情報が必要であること。

5 教科書の活用で特色にしていること（主な自由意見）

(1) ☆本、一般図書の有効活用

○一般図書の教科書を用いるときは、季節や行事など生活に合わせて活用している。

(2) 小学校の教科書の活用

○小学校の教科書のうち、生徒自身ができそうな下学年の教科書を使用している。

○英語科では、小学校英会話で使用するノートをもとに進めている。

(3) 教材の工夫

○教科書をもとにして、振り返りや基礎項目を再編成したワークシートプリント等を作成している。

(4) 生徒の実態に応じて教科書を使用する上での工夫

○教科書を順番どおりに使えないため、個々の実態に合わせて使えるところを選んで
いる。また、個々の実態に応じた学習内容が教科書に含まれていない場合は、他の
教科書や資料から取り上げて指導している。

○生徒の実態に合わせて教科書の内容を一部変えながら使用している。

○個々の生徒の実態と教科の特性に応じて教科書と教師の自作教材等を工夫して使
い分けている。教員作成による補助プリント等を活用している。

○個の実態に合わせるため、グループ指導のときは別教材を使用している。

○実生活の中で身に付けておく必要性が高い事柄を中心に教科書を活用している。
絵や写真などの資料や生活に密着した手紙や説明などを活用している。

(5) 教員の指導力の向上

○教職員による共通理解と実践を徹底すること。そのためには、十分な教材研究と生
徒の実態に即した指導の実際を想定した指導案の立案及び授業後の評価・検証を怠
らないことが重要と考える。

(6) 閲覧の工夫

○教室に教科書を置く場所を設置し、どの学年の教科書も自由に閲覧できるようにして
いる。

(7) 特色ある教育活動

○教科書選択の際には、小学校特別支援学級担任や生徒の保護者と連携している。

○特別支援学級で授業では、交流学习時に共通の話題で話ができるよう指導の工夫を
している。例えば交流学习時に行う理科実験等を行ったり、国語では短歌や俳句を
作ったりし、指導内容及び進度等も合わせて計画的に取り組ませている。

○在籍生徒は、将来私立高校への進学を希望しているので、教科書の基礎部分の学習
を徹底して行っている。

[小中学校]

6 教科書選択及び活用等についての要望（小中学校全体の集計）

(1) 一般図書への要望

- 個々の実態に合わせた一般図書の種類の増加と選択の幅の拡大をしてほしい。
- 各教科に系統性のある一般図書がほしい。
- 一般図書の教師分を配布してもらいたい。
- 一般図書が出版社の都合等の理由で選べなくなることがないようにしてほしい。
- 生徒の興味関心を引きつけるような一般図書を増やしていただきたい。
- 年間通して使用できる一般図書があればありがたい。
- 一般図書の一覧表に記載されている量が膨大で書名、著者、出版社のみなので、簡単な特色が書かれていると利用しやすい。

(2) ☆本への要望

- ☆本と検定本の中間的なもので、知的障害特別支援学級に在籍している児童に対応できるようスモールステップで系統化された教科書があるとよい。
- ☆本の教師用指導書があるとよい。
- ☆本の種類をもっとレベル別に増やしてもらいたい。理科・社会版があるとよい。
- ☆本には、カラーページ、図を多くしてほしい。
- 子どもの生活と結びつけるため「挿絵」を今の時代に合ったものにしてほしい。
- ルビ付きの☆本、直接書き込める☆本がほしい。
- 各学年ごとの☆本が1セット配布されるとよい。

(3) 検定教科書への要望

- 障害特性を考慮した教科書にしてほしい。
- 漢字にルを付けること、文字のポイントを大きくすることをしてほしい。
- 言葉と絵が結びついているような教科書がほしい。例えば、動作の言葉が絵とマッチングできるもの。
- 国語・数学はドリル・ワーク的な課題が多く掲載されている教科書があるとよい。
- 文字が少なく図や絵がはっきりしたものにしてほしい。
- 問題解決のページが多くあることを希望します。

(4) 検定教科書の教師用指導書への要望

- 障害特性に応じたバラエティに富んだ指導方法、アイディアのある指導書がほしい。
- 特別支援学級の活用を想定した指導事例、展開例などの資料などを記載してほしい。

(5) 教科書全般に対する要望

- 書き込みができたり、繰り返し練習ができたりするワーク形式の教科書がほしい。
- 教科書に対応した副教材（教科書に沿った基礎・基本の反復練習）がほしい。
- 特別支援学校学習指導要領に基づく、各教科の指導内容や段階の一覧表のような指導書があるとよい。

(6) 教科書選択にかかわる情報提供

- どのような教科書があるのか情報が乏しい。特別支援学級の教科書一覧リストをリストだけでなく、実物を教師が手にとって見ることができるシステムにしてほしい。
- 一般図書の選択の時に、文科省のHP等図書の詳しい情報が得られるとよい。また、教科書を活用して効果があった指導事例、教材等を情報収集し、データベース化して誰でも活用できるシステムを作してほしい。

(7)小中学校全ての教科書の購入

- 子どもの実態や、学習する教科によって使用するものが違うので、小中併せて全学年の教科書を購入してほしい。能力や特性は個人により千差万別であり、統一教科書の使用は限定的である。
- 検定教科書と☆本や一般図書とを同時に支給してほしい。
- 個人でも単元に応じて習熟度の差が大きく、複数の下学年の指導が必要。教科書・指導書ともに複数学年（小学校も含む）のものが手元に必要である。

(8)障害特性に応じた教科書

- 教材自体に興味を惹くおもしろくて分かりやすい内容の例題等が含まれたり、レベルごとに問題を選択できるようになっていたりする教科書がほしい。
- 知的障害がボーダーの生徒や学年に比べ少し遅れている生徒、LDの生徒などに対応できる教科書があるとよい。

(9)通年通して使用できる教科書

- 社会や理科について、3段階ぐらいの内容が示された教科書があればよい。

(10)デジタル教科書への要望

- 該当学年までの履修内容をおおまかに網羅できるデジタル教科書を求める。

(11)児童生徒の実態に応じた選択の方法

- 個々の生徒の特性、発達段階、状況等に応じた柔軟な教科書選択ができるようにしてほしい。

(12)選択の方法の簡略化

- 簡単にそして自由に教科書を選択し、組み合わせて選べるとよい。選択の手続きをより簡潔にしてほしい。

(13)補助教材の配布

- 学校で選定した副教材(生徒の実態にあった問題集など)についても補助してほしい。

(14)採択の時期を遅らせること

- 教科書の採択の時期が早く児童生徒の実態に合わせられないため、特別支援学級の教科書のみ時期を遅らせてほしい。

(15)教員や管理職の専門性の向上

- 選択された教科書を活用して、いかにして教師が専門性を駆使して児童に応じた内容を提示できるかが重要である。
- 教科書採択前に校長対象の研修会を行う必要である。
- 特別支援学級経験年数の少ない教員にとって、生活単元学習や自立活動などの指導に役立つ参考資料が整備されると指導しやすい。

VII 全体考察

1 国語、算数・数学、音楽で「選択」した教科書の傾向

小中学校特別支援学級（知的障害、自閉症・情緒）全体の傾向として、文部科学省検定教科書を選択している割合が高い。また、小学校 94 %、中学校 75 %であり小学校が中学校と比較して、19 ポイント高い。障害種別の教育課程状況について、知的障害特別支援学級では、領域・教科を合わせた指導が 70 %弱を占めること、自閉症・情緒障害特別支援学級でも 56 %であったことを踏まえると、当初は検定教科書よりも一般図書や☆本を選択している学級が多いと予想された。しかし、結果は検定教科書を選択して指導していることが明らかになった。

☆本を選択している学級は、小学校 3 %、中学校 11 %と少ない。一般図書を選択している学級も、小学校 3 %、中学校 17 %と少ない。小学校の☆本や一般図書の選択が中学校よりも割合が低い結果となった。

2 教科書の活用場面について

3 教科の教科書の活用場面には、教科の特性が反映された結果となった。

国語の教科書は約 60 %が、算数・数学では約 70 %が特別支援学級単独での使用となった。交流及び共同学習と特別支援学級との併用をしている学級は、中学校の国語の教科書が 50 %と最も多かった。

音楽の教科書の活用場面は、小中学校共に交流及び共同学習が 55 %程度になっている。特別支援学級との併用を含めると小学校は 90 %、中学校は 80 %弱が通常の学級での授業で活用されている。選択された検定教科書の教科では、通常の学級での音楽の授業での活用が最も多くなった。

3 選択した教科書の活用状況について

小学校では 75 %、中学校では 72 %が選択した教科書を有効に活用しており、共に高い結果となっている。特に小学校の音楽での活用は 90 %を超えた。ただし活用が十分にされていない学級が小学校 10 %、中学校 15 %ある。

回答のあった特別支援学級の教科書の主な活用状況として、主に特別支援学級の国語と算数の授業で検定教科書を使用し、おおむね活用できていることが伺える。

4 活用されていない理由や問題点について

選択した教科書が十分に活用できていない理由として、小中学校ともに 70 %弱が「個々の実態に合っていないこと」を一番に上げている。また、年間通して指導できないこと、グループ指導で統一して使用ができないことも、小中学校で同様の割合にあることから、問題として上がっている。中学校の音楽では、活用は高いが年間通して使用できない学級が多い。

選択している学級数が最も少ない☆本についても、活用状況と活用されていない理由とを分析した。☆本が活用されていると回答した小学校特別支援学級 76 %、中学校特別支援学級は 60 %であった。小学校の結果は、全体の活用度と同程度であった。ただし中学校の活用度は全体よりも 12 ポイント低い。

☆本が活用されていない特別支援学級の理由として最も多かったのは、個々の実態に合っていないことである。中学校全体の傾向よりも 5 ポイント高い。年間通して使用できない理由は 25 %弱である。

☆本を選択している学級は数こそ少ないが、おおむね☆本に対して満足して活用していることが伺えた。

5 教科書の活用で特色にしていることについて

小中学校全体を通して、個々の児童生徒の実態に応じて、選択した教科書の内容を取捨選択しながら工夫して使用していることが伺えた。

小学校では、実生活と結びつけて大切な部分を抜粋したり、視聴覚機器を活用した取組をしたりしている。中学校においても生徒の実態に応じて一部焦点化を図ったり、下学年（中学校では小学校の教科書）の教科書を意図的に使用したりしている。中学校では、選択に際して、小学校特別支援学級と連携を取っている例も多かった。

6 教科書選択及び活用に関する要望について

教科書選択及び活用に関する要望が数多くあがった。各教科の改善については、次の課題があった。

□検定教科書…漢字にルビを付けることや文字のポイントを大きくすること

□☆本…生活と結びつける挿絵の改訂

□一般図書…図書の種類を増やすこと

全体的な要望として、障害の程度や発達段階の高い児童生徒の在籍に対応するために、☆本と検定教科書の間を埋める教科書の開発を求める要望も多かった。また、教師用指導書については、☆本や一般図書の指導書の開発、検定教科書の指導書に具体的な指導例を記載することが上がった。系統性があり、年間通して活用できる教科書についても記載が多かった。

以上のように、教科書そのものに対する要望には、現状の教科書をより活用できるようにするための具体的な提案が数多く含まれていた。

そのほかには、教科書選択の際に、選択するための資料の少なさを危惧する声も多かった。一般図書や☆本の内容については、どのような教科書であるのか参考となる情報提供のシステムについての記載もあった。例えば、文部科学省等のHPに、教科書の内容、指導事例の紹介をデータベースにアップする等、有効な方策が示された。

教科書選択の幅の拡大については、現状の学年単位の教科書選択では、個々の実態に合わせた指導等に対応しきれないといった訴えも多く、個別の教科書選択や教科書の複数選択について強い提案があった。

これらの提案を踏まえて、手続きの改訂も含め、早急に改善を求めていく必要性がある。

[まとめ]

特別支援学級において選択された教科書が有効に活用されている結果は、肯定的に受け止めたい。しかし、70%近くが検定教科書をそのまま選択されているという結果には再考の余地があるといえる。知的障害特別支援学級に在籍する児童生徒の障害特性等からも、当該学年の検定教科書の活用は難しいと思われる。ましてや領域・教科を合わせた指導において、検定教科書の活用はなおさら困難である。

このように検定教科書を選択している背景には、検定教科書を強く望む保護者や児童生徒の存在の大きさ、通常の学級との交流をしている現状、一般図書や☆本のよさが理解されていない現状がある。児童生徒の実態に応じた教科書選択ができない教員の課題も浮き彫りになった。

今後は、検定教科書を選択する上での課題や一般図書と☆本の積極的な選択を促す方法を検討していくことが重要である。